

ネパールの造林技術協力活動に携わって

藤原 達久

ソ連のガガーリンは、地球は青かったと言った。私はこの言葉が大好きである。なぜならば私が子供の頃耳にした新鮮な言葉であったからである。

私は地球に住む人間として、この地球を大切にしたい。また、将来の地球の為に自然を最重点に考えた行動を起こす必要がある。昭和55年7月より57年7月までの2年間に青年海外協力隊員としてネパールで過ごした。そのわけはネパールの山の荒廃にあった。私は小さな頃より、山の中で暮らし山の恵みによって育てられた記憶がある。それが原点となり、大学時代には、ネパールの山の荒廃や砂漠化の進むアフリカの現状を耳にした時、何とか協力活動ができればと願っていた。協力隊参加という形でその願いを果すことができたが、実際に行ってみると自分が考えていた様には現実とは問題解決の糸口さえみあたらない様相を呈していた。これから記述する事が、これからの海外林業の協力活動に役立つことであれば幸いと思う。

ネパールの山

ネパールは周知の通りエベレストに象徴されるようにヒマラヤ山脈が東西に走る山岳地帯である。しかし、インド平原に近いタライ地方は、山岳地帯に平行に走っている海拔200mの亜熱帯のベルト地帯である。

ネパール人の多くは、カトマンズを標高基準とする山岳地帯に農業を中心に生活している。しかし、農業の生産を増加させる事は、ネパールの山をどんどんつぶしていくという皮肉な現象となって表われてきている。これは、結果として天まで届く段々畑の出現につながっているのである。食べる為に山を焼き、畑を作る。まさに行きつく所は、死を意味する行動を彼らは真面目に一生懸命にやってきたのである。私は、このネパールの山々を見た時に自分の生まれ育った山を思い出さずにいらなかった。なぜ、田舎の山には木があるのだろうかと素朴な疑問を持った事を覚えている。この写真の様に山は荒廃し段々畑と変わりつつある。また、30年前にはネパール全体の60%に森林があったが、現在では30%以下に落ちこんでいる。まさに、恐怖を感じるを得ないのである。

山道を歩いていた時の事である。山が開けて川が見えて来た事があった。それはに

FUJIWARA, Tatsuhisa : Participating in the Technical Cooperation for Reforestation in Nepal

静岡県大仁中学校



写真-1 荒廃した山



写真-2 マキを運ぶ、女、子供達

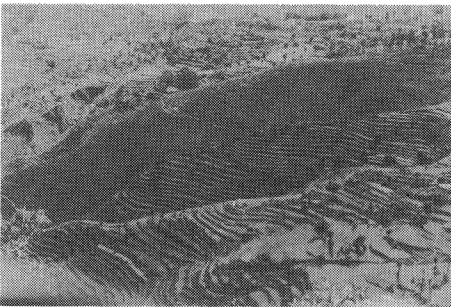


写真-3 段々畑と集落

ごった川であった。水かさも増えているわけでもなく、抜ける様な青空が広がっていたのに、そこを流れていた水は濁っていたのである。これは、やはり山の荒廃が原因しているのである。上流には、木が一本も無いのである。少しの雨でも泥を流し川の水を汚すまさに悪魔なのである。また、日本の昔の様にマキを使い煮焚をしている。マキを集めるのは、女・子供である。これは毎日の仕事としてかかせない労働である。年々マキとりの山は遠くなるばかりで一向に仕事が増えるとは思えないきびしい暮らしがそこにはあった。ネパールの山は一口に言って、死を前にした生死をさまよう人間である様にも見えた。ここに協力活動の真髄を発見した気がした。

造林活動

私の任期は2年間。その間直接造林活動ができたのはわずか1回であった。造林面積は47.5 ha。82,640本の造林ができた。その他に村人達に、46,300本の苗木を配布する事ができた。造林には日本と異なりポリエチレンチューブを利用した育苗方法がとられている。種子まきをしてから約6か月～12か月で山出しをする。日本と比較すれば、まだほんの発芽した程度にすぎない小苗を植栽す

るのである。

しかし現地を見た時に、日本で行われているような裸根苗による造林方法が可能なような気がして試みる事を決意した。その理由は、ネパールの造林方法で作業すると苗畑と造林地が遠い場合あるいは造林地の傾斜がはげしい場合には必ずしも適当ではないと判断した事、ネパールの雨季の気象条件を考えた時に十分に造林が可能であ

と思われた事の2点である。

その実験結果は、在任中に協力隊事務局とFAOのネパール本部に提出したが、この実験を通して感じたことは、技術的なアドバイスの難しさや啓蒙活動といった見えない働きかけの苦しさである。

おわりに

ネパールの造林は、現在2つの方法によって行われている。最初に植栽日より約1か月前に造林予定地に植穴を掘り、そこに植栽当日に現地に苗木を運び植栽する方法と、前者の植穴掘りは同様に行うが、植栽をする時に1日目はとにかく造林予定地点に苗木から苗木を運んでおき、2日目に植栽作業だけをする方法である。どちらもポリエチレンチューブを使用した苗木であるためにできる方法なのである。どちらも平均1日1人100~200本ぐらいが限度の様である。実質労働時間は6時間から7時間ぐらいである。

これからの海外林業協力への期待は、いままで述べてきたような問題を解決できる様な形で、住民サイドに立って、住民とともに協力しあえるような活動を模索していくことである。

新刊紹介

◎熱帯林とその環境・第2版 (LONGMAN, K.A. & JENIK, J.: Tropical Forest and its Environment, 2nd ed. Longman Scientific & Technical, 1987, x + 347 pp. 邦価約6,000円)

地球上に残されている貴重な森林資源のひとつである熱帯林はいま急速に減少しつつあり、乱開発を避け荒廃した林地を速やかに再生させることの必要性が呼ばれている。いっぽう、開発の有無にかかわらず残された熱帯林を適正に管理していくことの必要性も今後ますます増していくと思われる。熱帯林を取り抜いていく際、われわれにとって最も重要なのは熱帯林のもつ性質や機能を十分に理解することであろう。

本書は1974年に出版されたものにその後集積された研究成果を取り入れて大幅に改訂されたものである(引用文献は480篇余)。本書の目的としては、“熱帯林に関して得られた生物学的情報を要約し、熱帯林を利用・管理する際それらがどのように関わってくるのかを提示する”ことが挙げられている。重点が置かれている研究分野は植物生態学、植物生理学などであり、対象とされているのは当然ながら熱帯林の主役ともいべき樹木である。本書は、熱帯林について現在どの程度まで明らかにされているのかを概観するのに適当なテキストブックのひとつといえよう。(小久保醇)